

# コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープリニアーストロークと音素配列

## －自由形態素を中心に－

宮川 創

京都大学大学院

### 1. はじめに

コプト・エジプト語<sup>1</sup>サイド方言<sup>2</sup>のスペリングにおけるスープリニアーストローク（以下、SS と略す）は、Worrel (1933) 以来、成節子音を表す記号であるとみなされ、近年の参照文法（Layton 2002）でもこの解釈が採用されている。しかしながら、この説は、音韻論的検証は十分になされていない。そこで、本論文は、この「SS=成節子音」説を音韻論的に検証することを目的とする。

### 2. 書記素と音素目録

サイド方言は、コプト文字をもちいて書かれた。サイド方言で用いられるコプト文字は、24 文字のギリシア文字由来の文字と 6 文字の民衆文字由来の文字を組み合わせで書かれる音素文字である。音素文字であるため、基本的には、実際の音素と文字が対応していると考えられる。本研究は紀元後 3-4 世紀ころのコプト語サイド方言を対象とする。この時期のコプト語は、コプト文字が使われだした時期に比較的近く、大幅な音変化は被っていないと思われる。以下で、コプト語サイド方言の本来語<sup>3</sup>の書記体系と音素体系、推定音価との関係を表す。

---

<sup>1</sup> コプト語と略称される。この言語は、系統的には、アフロ・アジア語族エジプト語派に属するエジプト語の歴史的最終段階である。エジプト語史は、概略すると、古エジプト語>中エジプト語>新エジプト語>民衆文字エジプト語>コプト・エジプト語（コプト語）となる。コプト語は、20 世紀のクラウディオス・ラビーブ（イクラディユース・ラビーブ）を端緒とする言語復興運動の中で育った「母語話者」とされる者がエジプトに数人いることを除けば、現代では死語であるが、コプト・キリスト教会の典礼言語として用いられ学ばれている。

<sup>2</sup> コプト・エジプト語の一方方言である。サイド方言の文献は主に紀元後 3 世紀から 14 世紀の間、残されている。他の方言には、ボハイラ方言、ファイユーム方言、オクシュリンコス方言、リュコポリス方言、アクミーム方言などがある。サイド方言は、紀元後 3 世紀から 9 世紀の間、コプト語における「標準語」としての言語社会的役割を果たした。そのため、コプト語諸方言の中でも、文献がより多く残されている。

<sup>3</sup> ギリシア語借用語については、コプト語本来語にない、発音の規則がいくつかある。本研究は、ギリシア語借用語については、対象としないため、ここでは省略する。

## (1) 子音字

無声破裂音:	π <p> <sup>4</sup> /p/ *[p]	τ <t> /t/ *[t]	κ <k> /k/ *[k]
口蓋化破裂音:	χ <č> /tʃ/ *[tʃ]	ϙ <c> /kʃ/ *[kʃ]	
有声破裂音 <sup>5</sup> :	Δ <d> /d/ *[d]	Γ <g> /d/ *[g]	
無声摩擦音:	φ <f> /f/ *[f]	ς <s> /s/ *[s]	ϕ <š> /ʃ/ *[ʃ]      Ϸ <h> /h/ *[h]
有声摩擦音:	β <b> /β/ *[β]	ζ <z> /z/ *[z]	
鼻音:	μ <m> /m/ *[m]	ν <n> /n/ *[n]	
側面接近音:	λ <l> /l/ *[l]		
震え音 <sup>6</sup> :	ρ <r> /r/ *[r]?		

## (2) 母音字

無強勢母音:	ε <e> /ə/ *[ə], α <a> /e/ *[e]
強勢弛緩母音:	ε <e> /ε/ *[ε], α <a> /a/ *[a], ο <o> /ɔ/ *[ɔ]
強勢緊張母音 <sup>7</sup> :	ι <i> /i/ *[i], ει <ei> /i/ *[i], η <ê> /e/ *[e], ω <ô> /o/ *[o] οϣ <ou> /u/ *[u]

## (3) 母音字の特殊な読み方

母音+声門閉鎖音:	vv <sup>8</sup> <vv> /vʔ/ *[vʔ(ə)], v <# <sup>9</sup> v> /ʔv/ *[ʔv]
半母音:	ι <i> /j/ *[j], ει <ei> /j/ *[j], οϣ <ou> /w/ *[w], γ <u> /w/ *[w]

## 3. スープリニアーストロークについて

本稿が問題とするスープリニアーストローク (SS) は文字の上に置かれる線である。この線がふさされるのは、大別すると、聖名 (Sacra Nomina) などの省略がなされる場合 (ϯ = ιησοϥς 「イエス (・キリスト)」など) と子音字の上につく場合である<sup>10</sup>。本稿では、子音字の上に置かれる場合を問題にする。なお、SS が母音字につく文献もあるが、3世紀前

<sup>4</sup> <>は書記素表記, //は音素表記, []は音声表記である。\*は推定音であることを表す。

<sup>5</sup> 主に、ギリシア語借用語にみられ、コプト語本来語には、少ない。

<sup>6</sup> ふるえ音以外である可能性もある。

<sup>7</sup> 緊張母音の代わりに、長母音であるとする捉え方もある。(Loprieno 1995: 46) 本稿は、Allen (2013) の緊張母音であるとする説を採用している。

<sup>8</sup> vは母音字, <v>は母音字素, /v/は母音音素, [v]は母音を表す。

<sup>9</sup> #は語頭を表す。

<sup>10</sup> Ϸⲓⲛⲁⲗⲗのように、機能が不明なものもある。

## コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープリニアーストロークと音素配列

後の「ナグ・ハマディ写本」など、主なテキストは、たいていは子音字1字につく<sup>11</sup>。本稿は、この3世紀前後のコプト語サイド方言の書記法を対象とする。

SSが成節子音を表すとした最初の研究は Worrell (1933) である。彼は、イエスペルセンの成節子音の概念をあげ、ϣⲁⲣⲓⲡ̄ <sapR> = *šabr* (vernacular Arabic) など、コプト文字で書かれたアラビア語単語の例から SS が成節子音 (syllabic consonant) をあらわすということを示唆している。しかし、彼の場合、モーラと音節との区別がついていないなど、現代の音韻論からみれば、かなり問題がある。

「SS=成節子音」説をコプト語サイド方言固有の単語にあてはめると、音節の区切りと子音音素体系を最もミニマルかつ体系的に解釈できることを示したのが、Depuydt (1993) である。Depuydt (1993) の解釈は、コプト語サイド方言のリファレンスグラマーである Layton (2002) によって採用されている。彼の理論はエレガントであるが、SS が音節子音を表す証拠については十分に提示されていない。

成節子音とみる見方に対して、SS がついた子音字を読むときは、前後に schwa を挿入すると考える Loprieno (1995) などの解釈も存在する。しかしながら、Beltzung & Patin (2007: 1-2) の言うように、ドイツ語の *sagen* [za:gən] ≈ [za:gŋ] (Siebs 1961, cited in Clark & Yallop 1995: 68; Beltzung & Patin 2007:2), 英語の *sudden* [sʌdən] ≈ [sʌdŋ] (Clark & Yallop 1995: 68; Beltzung & Patin 2007:2) など、ç と əc は多くの言語で free variation であり、この場合、əc は音声実現の結果であって、音韻レベルでは ç であると解釈するほうが少ない音素での解釈が可能になる<sup>12</sup>。このように、音韻レベルでは成節子音であるが、音声レベルでは成節子音の前後に「支え」の schwa が入ることはできる、とすれば「SS=成節子音」説と「SS=schwa 挿入」説の2つの解釈を統合する事ができる。そのため、本稿はこの統合的立場をとる。

### 4. 音韻論的分析<sup>13</sup>

サイド方言の辞書である、Smith (1999) の *Coptic-English Concise Dictionary* (2nd ed.) から、SS が付されている単語を抽出し、どの字の上にその SS が付されているか調べた。Smith (1999) は、「ナグ・ハマディ写本群 (Nag Hammadi Codices)」を読解するための辞書である、そのため、方言は、3世紀前後のサイド方言が主である。中には、いくつかのリュコポリス方言形も記載されているが、それは[ ]で辞書編集者自ら示されている。今回の調査では、リュコポリス方言は分析対象からはずした。対象とする単語は、接語や接辞を除く自由形態素のみを抽出した。なお、動詞は、基本形のみを対象にした。そのほか、複合語は対象に入れなかった。

<sup>11</sup> 写本上、ϣⲁⲣⲓⲡ̄のように、SS が伸ばされて隣接する子音字の上に来ているものもある。この例の場合は、ϣⲁⲣⲓⲡ̄であると解釈される。

<sup>12</sup> 筆者が知る限り、現代東アルメニア語など、free variation の schwa を書かない音素文字体系も存在する (Dum-Tragut 2009: 30ff)。

<sup>13</sup> 以下、SS 付き子音の翻字をラテン文字の大文字で表す。ex. ⲙ̄ = M, ⲙ = m。

## 宮川創

抽出した単語を音素表記にし、それぞれの音素をその音素が対応するソノリティの値に書き換え、SSが付された子音字が、ソノリティのピークに合致しているか調べた。一般には、音節核は、ソノリティのピークにあると考えられ、それが子音の場合、その子音は成節子音とされる<sup>14</sup>。

以下の(4)は、本稿が採用したソノリティ値とそれに対応する子音音素である。

(4)

ソノリティ値	1	2	3	4	5	6	7
音素	/t/, /p/, /k/, /ʔ/, /kʰ/, /tʰ/	/d/, /g/	/f/, /s/, /ʃ/, /h/	/β/, /z/	/m/, /n/, /r/, /l/	/w/, /j/	/i/, /e/, /ɛ/, /e/, /ə/, /ɑ/, /ɔ/, /o/, /u/

(5)-(7)は、SSが付された文字に対応する音素がソノリティピークであったパターンである。これらの語は、全体の171語のうち、114語、パーセンテージになおすと約67%を占めた。

(5) 語末のソノリティピークの子音にSSがくるパターン

a. VC#のパターン

No.	コプト文字	意味	翻字	音素表記	ソノリティ値
1.	ⲱⲟⲩⲙ̄	extinguish	<ôšM>	/'ʔo.ʃm̄/	#17\$35#
2.	ⲱⲕⲛ̄	stop	<ôčN>	/'ʔo.t̪n̄/	#17\$25#
3.	ⲉⲓⲧⲛ̄	ground	<eitN>	/'ʔi.t̪n̄/	#17\$15#
4.	ⲱⲕⲙ̄	be gloomy	<ôkm>	/'ʔo.km̄/	#17\$15#
5.	ⲱⲟⲩ̄	be cold	<ôcB>	/'ʔo.kʰβ̄/	#17\$14#
6.	ⲛⲟⲩⲗ̄ⲙ̄	be saved	<nouhM>	/'nu.hm̄/	#57\$35#
7.	ⲟⲩⲱⲟⲩ̄	knead	<ouôsm>	/'wo.sm̄/	#67\$35#
8.	ⲟⲩⲱⲟⲩ̄	repeat	<ouôhm>	/'wo.hm̄/	#67\$35#
9.	ⲛⲟⲩⲗ̄ⲟ̄	yoke	<nouhB>	/'nu.hβ̄/	#57\$34#
10.	ⲟⲩⲟ̄ⲩ̄	sweep	<sohR>	/'so.hr̄/	#37\$35#

<sup>14</sup> Goldsmith (2011)はこの立場を、"sonority view"と呼んでいる。

コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープリニアーストロークと音素配列

11.	ⲛⲟϥϩ̅̅	copulate	<nouhB>	/'nu.hβ/	#57\$34#
12.	ⲟϥⲱϩ̅̅	answer	<ouôsb>	/'wo.hβ/	#67\$34#
13.	ⲛⲟϥⲧ̅̅	rest	<moutN>	/'mu.t̅̅/	#57\$15#
14.	ⲛⲟϥⲧ̅̅	be sweet	<noutM>	/'nu.t̅̅/	#57\$15#
15.	ⲗⲁⲕ̅̅	piece	<lakM>	/'la.k̅̅/	#57\$15#
16.	ⲟϥⲱⲧ̅̅	change	<ouôtn>	/'wo.t̅̅/	#67\$15#
17.	ⲟϥⲱⲧ̅̅	pour	<ouôtb>	/'wo.t̅̅β/	#67\$14#
18.	ⲭⲟϩ̅̅	be unclean	<çohM>	/'tʃ.h̅̅/	#37\$35#
19.	ⲥⲱϩ̅̅	sweep	<sôhr>	/'so.h̅̅/	#37\$35#
20.	ⲥⲱϩ̅̅	be faint	<sôšM>	/'so.ʃ̅̅/	#37\$35#
21.	ϩ̅̅ⲥⲱ	be faint	<šôsM>	/'ʃo.s̅̅/	#37\$35#
22.	ϩ̅̅ⲟⲥ̅̅	market	<hosB>	/'hɔ.s̅̅β/	#37\$34#
23.	ϩ̅̅ⲱϩ̅̅	be withered	<šôhb>	/'ʃo.h̅̅β/	#37\$34#
24.	ϩ̅̅ⲱⲕ̅̅	wither	<hôkM>	/'ho.k̅̅/	#37\$15#
25.	ϩ̅̅ⲱⲧ̅̅	be joined	<hôtr>	/'ho.t̅̅/	#37\$15#
26.	ⲭⲱⲕ̅̅	wash	<çôkM>	/'tʃo.k̅̅/	#17\$15#
27.	ⲭⲱⲕ̅̅	salt	<çôkr>	/'tʃo.k̅̅/	#17\$15#
28.	ⲥⲟⲥ̅̅	ointment	<socN>	/'so.k̅̅/	#37\$15#
29.	ⲥⲱⲧ̅̅	hear	<sôtM>	/'so.t̅̅/	#37\$15#
30.	ⲥⲱⲧ̅̅	be turned	<sôtR>	/'so.t̅̅/	#37\$15#
31.	ϩ̅̅ⲟⲧ̅̅	shut	<šotM>	/'ʃɔ.t̅̅/	#37\$15#
32.	ϩ̅̅ⲱⲥ̅̅	wither	<hôcb>	/'ho.t̅̅β/	#37\$14#
33.	ϩ̅̅ⲱⲥ̅̅	be cold	<hôcb>	/'ho.t̅̅β/	#37\$14#
34.	ϩ̅̅ⲱⲧ̅̅	murder	<hôtb>	/'ho.t̅̅β/	#37\$14#
35.	ϩ̅̅ⲱⲧ̅̅	muzzle	<šôtb>	/'ʃo.t̅̅β/	#37\$14#
36.	ⲥⲟⲥ̅̅	storm	<cosM>	/'kʃ.s̅̅/	#17\$35#
37.	ⲡⲱϩ̅̅	serve	<pôšN>	/'po.ʃ̅̅/	#17\$35#
38.	ⲧⲱϩ̅̅	knock	<tôhM>	/'to.h̅̅/	#17\$35#
39.	ⲧⲁⲡ̅̅	cumin	<tapN>	/'ta.p̅̅/	#17\$15#
40.	ⲧⲱⲥ̅̅	repel	<tôcN>	/'to.k̅̅/	#17\$15#
41.	ⲧⲱⲕ̅̅	pluck	<tôkM>	/'to.k̅̅/	#17\$15#
42.	ⲥⲱⲭ̅̅	be small	<côčB>	/'kʃo.t̅̅/	#17\$14#
43.	ϩ̅̅ⲱⲥ̅̅	kill	<hôsb>	/'ho.s̅̅β/	#37\$34#
44.	ⲟϥⲱⲧ̅̅	change	<ouôtb>	/'wo.t̅̅β/	#67\$14#
45.	ϩ̅̅ⲱⲕ̅̅	wither	<hôkM>	/'ho.k̅̅/	#37\$15#

## b. vccC#のパターン

1.	βολβλ	dig up	<bolbL>	/βɔl.βl/	#475\$45#
2.	ροογτ̄ñ	road	<hooutN>	/hɔw.t̄ɲ/	#376\$15#
3.	σοογτ̄ñ	be straight	<sooutN>	/sɔw.t̄ɲ/	#376\$15#
4.	ωορω̄p̄	upset	<šoršR>	/ʃɔr.ʃr/	#375\$35#
5.	χοοτ̄ñ	headlog	<čoftN>	/t̄ɔf.t̄ɲ/	#373\$15#
6.	χολχλ	fence	<čolčL>	/t̄ɔl.t̄l/	#275\$15#
7.	τηγτ̄ñ	you pl. obj. <sup>15</sup>	<têutN>	/tew.t̄ɲ/	#176\$15#
8.	σoмσ̄ñ	touch	<comcM>	/k'ɔm.k'ɲ/	#175\$15#
9.	τοητ̄ñ	be like	<tontN>	/tɔn.t̄ɲ/	#175\$15#
10.	τοβτ̄β	form	<tobtB>	/tɔβ.t̄β/	#174\$14#
11.	ογocτ̄ñ	broaden	<ouostN>	/wɔs.t̄ɲ/	#673\$15#
12.	ετοmt̄ñ	be darkened	<htomtM>	/htɔm.t̄ɲ/	#3175\$15# <sup>16</sup>
13.	εβοpβ̄p̄	push	<hborbR>	/hβɔr.βr/	#3475\$45#
14.	ελοct̄ñ	mist	<hlostN>	/hlos.t̄ɲ/	#3573\$15#
15.	ωτοpτ̄p̄	disturb	<štortR>	/ftɔr.t̄r/	#3175\$15#

## (6) 第一音節のソノリティピークの子音に SS がくるパターン

## a. #Ccv のパターン

1.	ῥβε	enclosure	<Rbe>	/r.'βe/	#5\$47#
2.	λρηm	roar	<Lhêm>	/l.'hem/	#5\$375#
3.	ῥων	cloak	<Ršon>	/r.'ʃɔn/	#5\$375#
4.	λρωβ	steam	<Lhôb>	/l.'hoβ/	#5\$374#
5.	μηγτ	north	<Mhit>	/m.'hit/	#5\$371#
6.	νηωτ	be hard	<Nšot>	/n.'ʃɔt/	#5\$371#
7.	μηααγ	tomb	<Mhaau>	/m.'ha.ʔɣ/	#5\$37\$16#
8.	ῥσω	animal pen	<Rsô>	/r.'so/	#5\$37#
9.	νητοογ	they	<Ntoou>	/n.'tɔw/	#5\$176#
10.	νητοογn	then	<Ntooun>	/n.'tɔwn/ <sup>17</sup>	#5\$1765#
11.	νητεγnoγ	immediately	<Nteunou>	/n.təw.'nu/	#5\$175\$57#

<sup>15</sup> 他の人称「接尾辞」は拘束形態素だが、この辞書では、2人称複数形のみ、自由形態素として扱われている。これは、2人称複数形の接尾辞は、他の人称にはないふるまいをするからである。

<sup>16</sup> 英語の stink #31751#のように、初頭の子音でソノリティピークが形成されているが、初頭の無声摩擦音+無声閉鎖音の組み合わせでは、初頭の無声摩擦音は成節的とはされない場合が多い。

<sup>17</sup> 最大頭子音制約から考えれば、<Ntooun> /n.'tɔ.wɲ/になってもおかしくはない。

コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープリニアーストロークと音素配列

12.	ḿκαδ	be painful	<Mkah>	/ḿ.'kah/	#5\$173#
13.	ḿτοϗ	he	<Ntof>	/ḿ.'tɔf/	#5\$173#
14.	ḿτοϑ	she	<Ntos>	/ḿ.'tɔs/	#5\$173#
15.	ḿκοτκ	sleep	<Nkotk>	/ḿ.'kɔtk/	#5\$1711#
16.	ḿτοκ	you.sing.masc.	<Ntok>	/ḿ.'tɔk/	#5\$171#
17.	ḿτηϑ	plant	<Ntêc>	/ḿ.'tekʲ/	#5\$171#
18.	ḿτωτḿ <sup>18</sup>	you pl.	<NtôtN>	/ḿ.'to.tḿ/	#5\$17\$15#
19.	ḿπο	mute	<Mpo>	/ḿ.'pɔ/	#5\$17#
20.	ḿτο	presence	<Mto>	/ḿ.'tɔ/	#5\$17#
21.	ḿτω	depth	<Mtô>	/ḿ.'to/	#5\$17#
22.	ḿκα	thing	<Nka>	/ḿ.'ka/	#5\$17#
23.	ḿτο	sing., fem. you	<Nto>	/ḿ.'tɔ/	#5\$17#
24.	ḿπε	temple	<Rpe>	/ḿ.'pɛ/	#5\$17#
25.	ḿτον	be at rest	<Mton>	/ḿ.'tɔn/	#5\$175#
26.	ḿϗε	forgetfulness	<Bše>	/β.'ʃɛ/	#4\$37#

b. #Cccv#のパターン

1.	ḿκϗα	sneer	<Lkša>	/l.'kʃa/	#5\$137#
2.	ḿθε	like	<Nthe>	/ḿ.'thɛ/	#5\$137#

c. #cCcv#のパターン

1.	ḿβιλε	kernel	<bLbile>	/βl.'βi.lɛ/	#45\$47\$57#
2.	ḿλϑε	pottery	<bLče>	/βl.'tʃɛ/	#45\$17#
3.	ḿḿωτ	staff	<hRbôt>	/hḿ.'βot/	#35\$471#
4.	ḿḿαλ	servant	<hMhal>	/hḿ.'hal/	#35\$375#
5.	ḿλϑο	lukewarm water	<sLho>	/sl.'hɔ/	#35\$37#
6.	ḿḿε	be at leisure	<sRfe>	/sḿ.'fɛ/	#35\$37#
7.	ḿḿε	serve	<šMše>	/ʃḿ.'ʃɛ/	#35\$37#
8.	ḿλπε	navel	<hLpe>	/hl.'pɛ/	#35\$17#
9.	ḿλϑομ	mustard	<šLcom>	/ʃl.'kʲɔm/	#35\$175#
10.	ḿḿτω	linen robe	<šNtô>	/ʃḿ.'to/	#35\$17#
11.	ḿḿϑο	set on fire	<tMho>	/tḿ.'hɔ/	#15\$37#
12.	ḿḿτε	fig	<kNte>	/kḿ.'tɛ/	#15\$17#
13.	ḿλϑε	torn cloth	<pLce>	/pl.'kʲɛ/	#15\$17#

<sup>18</sup> vcC#のパターンにも入れることができるが、煩雑さを避けるため、ここだけにおいておく。

## d. #cCc#のパターン

1.	з̄м̄с	spike of wheat	<hMs>	/h̄m̄s/	#353#
2.	л̄н̄с	linen	<šNs>	/f̄n̄s/	#353#
3.	ч̄н̄т	worm	<fNt>	/f̄n̄t/	#351#
4.	т̄б̄т	fish	<tBt>	/t̄β̄t/	#141#
5.	т̄н̄г	wing	<tNh>	/t̄n̄h/	#153#

## e. #ccCcv#のパターン

1.	ө̄н̄сө	seat	<thMso>	/th̄n̄.'sɔ/	#135\$37#
2.	ө̄н̄кө	afflict	<thMko>	/th̄n̄.'kɔ/	#135\$17#
3.	тс̄н̄кө	breast-feed	<tsNko>	/ts̄n̄.'kɔ/	#135\$17#
4.	тс̄в̄кө	reduce	<tsVko>	/ts̄β̄.'kɔ/	#134\$17#

## (7) 第一音節および語末のソノリティピークの子音に SS がくるパターン

## a. #cCcC#のパターン

1.	в̄р̄в̄р̄	boil	<bRbR>	/β̄r̄.β̄r̄/	#45\$45#
2.	т̄л̄т̄л̄	drip	<tLtL>	/t̄l̄.t̄l̄/	#15\$15#
3.	г̄м̄г̄м̄	roar	<hMhM>	/h̄m̄.h̄m̄/	#35\$35#
4.	с̄н̄с̄н̄	resound	<sNsN>	/s̄n̄.s̄n̄/	#35\$35#

ここまでは、SS とソノリティピークの子音が一致する例をみてきた。次に、SS とソノリティピークが合致しない例をみていく。これらの例は、i) ソノリティピークに同じソノリティの子音音素の連続 ('sonority plateau')ができ当該の子音音素がその sonority plateau に入るとき、ii) sonority plateau にもその子音音素が入らないとき、の2つに分けられる。i)は р̄н̄г̄ε /rmhε/, ii)は т̄в̄во /tβ̄β̄ɔ/のような場合である。

これらの語では、SS とソノリティピークは一致していない。しかしながら、①一音節内に非成節的な/m, n, β, l, r/が連続してはならないとする制約 >> ②初頭音節以外の音節は、頭子音を1つ持たなければならない制約 >> ③ソノリティピークは音節核を形成する制約、という制約ランキングで音節を考えると、少数を除きうまく説明できる。この制約ランキング以外のランキングは、説明できない例がより多くなる。なお、この制約群と制約ランキングは、いままでみてきた(5)-(7)の例にもすべて適合するため、ここで導入しても問題はない。



コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープリニアーストロックと音素配列

たとえば,  $\alpha\mu\bar{\eta}\tau\epsilon$  /ʔemnte/ を考えてみる. ʔe.mnte や ʔemn.te とすれば①に違反し, ʔem.ntε とすれば①には適合であるが, ②に違反する. ʔe.m̄.τ.ε とすれば, ③には違反するが, それよりも制約ランキングの高い①と②には違反せず, 最適解となる.

これを, 最適性理論 (Prince & Smolensky 1993) で用いられるタブローで示すと(8)のようになる.

(8)  $\alpha\mu\bar{\eta}\tau\epsilon$  のタブロー<sup>19</sup>

	①	②	③
ʔe.mnte	*!		*
ʔemn.te	*!		
ʔem.ntε		*!	
$\tau$ ʔe.m̄.τ.ε			*

(制約ランキング・・・①一音節内に非成節的な/j, w, m, n, β, l, r/が連続してはならないとする制約 >> ②初頭音節以外の音節は, 頭子音を1つ持たなければならないとする制約 >> ③ソノリティピークは音節核を形成するとする制約)

この制約群と制約ランキングで説明できる例は, ソノリティピークとSSが一致しない例57語のうち, 50語であり, パーセンテージで示すと, 約88パーセントである

(9) 第一音節にSSがくるパターン

a. #Ccvのパターン

1.	$\bar{\rho}\rho\eta\tau$	vow	<Rrêt>	/r̄.'ret/	#5\$571#
2.	$\bar{\rho}\rho\omega$	king	<Rro>	/r̄.'rɔ/	#5\$57#
3.	$\bar{\mu}\mu\omega\eta$	truly	<Mmon>	/m̄.'mɔn/	#5\$575#
4.	$\lambda\lambda\eta\beta$	ridicule	<Llêb>	/l̄.'leβ/	#5\$574#
5.	$\bar{\mu}\rho\tau\epsilon$	new wine	<Mris>	/m̄.'ris/	#5\$573#
6.	$\bar{\mu}\lambda\lambda\epsilon$	battle	<Mlah>	/m̄.'lah/	#5\$573#
7.	$\bar{\mu}\eta\omega\gamma\tau$	doorman	<Mnout>	/m̄.'nut/	#55\$71#
8.	$\bar{\mu}\rho\omega$	harbor	<Mrô>	/m̄.'ro/	#5\$57#
9.	$\bar{\beta}\rho\alpha$	seed	<Bra>	/β̄.'ra/	#4\$57#
10.	$\bar{\mu}\lambda\lambda\alpha\gamma$	tomb	<Mlaau>	/m̄.'la.ʔu/	#5\$57\$17#

<sup>19</sup> 入力/ʔemnte/に対する出力は,  $\tau$ で示される. \*は制約違反を, !は重大な制約違反を示す.

b. #cCcv のパターン

1.	ρῑ̄ρ̄ε	free person	<rMhe>	/r̄m̄.'hε/	#55\$37#
2.	κῑ̄νε	be fat	<kNne>	/k̄n̄.'nε/	#15\$57#
3.	ρ̄ββε	plow	<hBbe>	/h̄β̄.'βε/	#34\$47#
4.	τῑ̄νοογ	send	<tNnoou>	/t̄n̄.'nɔw/	#15\$576#
5.	τῑ̄μο	feed	<tMmo>	/t̄m̄.'mɔ/	#15\$57#
6.	χ̄ββες	coal	<čBbes>	/t̄β̄.'βεs/	#14\$473#
7.	τ̄ββο	cleanse	<tBbo>	/t̄β̄.'βɔ/	#14\$47#
8.	τῑ̄νο	pound	<tNno>	/t̄n̄.'nɔ/	#15\$57#
9.	σλμαῖ	jar	<cLmai>	/k̄l̄.'mai/	#15\$576#
10.	κ̄ρ̄μες	ash	<kRmes>	/k̄r̄.'mes/	#15\$573#
11.	αν̄σῑ̄με	ordinance	<ansMme>	/ʔen.s̄m̄.'mε/	#175\$35\$57#
12.	ρ̄ρ̄μαν	pomegranate	<hRman>	/h̄r̄.'man/	#35\$575#
13.	τ̄β̄νη	farm animal	<tBnê>	/t̄β̄.'ne/	#14\$57#
14.	β̄ῑ̄νε	date palm	<bNne>	/β̄n̄.'nε/	#45\$57#
15.	β̄λλε	blind person	<bLle>	/β̄l̄.'lε/	#45\$57#
16.	β̄ρ̄ρε	new	<bRre>	/β̄r̄.'rε/	#45\$57#
17.	σῑ̄με	appeal	<sMme>	/s̄m̄.'mε/	#35\$57#
18.	σ̄ββε	be weak	<cBbe>	/k̄β̄.'βε/	#14\$47#
19.	κ̄λλε	bolt	<kLle>	/k̄l̄.'lε/	#15\$57#
20.	ρ̄ββε	plow	<hBbe>	/h̄β̄.'βε/	#34\$47#
21.	ρ̄λλο	old man	<hLlo>	/h̄l̄.'lɔ/	#35\$57#
22.	τ̄ρ̄ρε	be afraid	<tRre>	/t̄r̄.'rε/	#15\$57#

c. #cCccv# のパターン

1.	μῑ̄τρε	witness	<mNtre>	/m̄n̄t̄.'rε/	#551\$57#
----	--------	---------	---------	--------------	-----------

d. #ccCccv# のパターン

2.	τ̄ρ̄β̄βιο	humiliate	<thBbio>	/th̄β̄.'βjɔ/	#134\$467#
----	-----------	-----------	----------	--------------	------------

(10) 語中音節に SS がくるパターン

1.	αμῑ̄τε	hell	<amNte>	/ʔe.m̄n̄'tε/	#7\$55\$17#
----	--------	------	---------	--------------	-------------

(11) 語末音節に SS がくるパターン

a. vcC# のパターン

1.	ειωρῑ̄	stare	<eiôrM>	/'jo.r̄m̄/	#67\$55#
----	--------	-------	---------	------------	----------

コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープレニアーストロックと音素配列

2.	сωρῖ	get lost	<sôrM>	/ˈso.rɪ̃/	#37\$55#
3.	σωλῖ	smell	<šôlM>	/ˈʃo.lɪ̃/	#37\$55#
4.	ωλῖ	embrace	<ôlM>	/ˈʔo.lɪ̃/	#17\$55#
5.	χωρῖ	point	<čôrM>	/ˈtʰo.rɪ̃/	#17\$55#
6.	χωρῖ	drive	<čôrM>	/ˈtʰo.rɪ̃/	#17\$55#
7.	τωλῖ	be dirty	<tôlM>	/ˈto.lɪ̃/	#17\$55#
8.	ρωρῖ	be broken	<hôrB>	/ˈho.rβ/ <sup>20</sup>	#37\$54#
9.	ωρῖ	restrict	<ôrB>	/ˈʔo.rβ/	#17\$54#
10.	сooγῖ	know	<soouN>	/ˈso.wɪ̃/	#37\$65#

b. ccC#のパターン

1.	κρoμρῖ	be dark	<kromrM>	/ˈkrɔ̃m.rɪ̃/	#1575\$55#
2.	ρλoμλῖ	be complicated	<hlomlM>	/ˈhlɔ̃mlɪ̃/	#3675\$55#

c. cCc#のパターン

1.	ρoμῖτ	copper	<homNt>	/ˈhɔ̃.mɪ̃t/	#37\$551#
2.	σoμῖτ	three	<šomNt>	/ˈʃɔ̃.mɪ̃t/	#37\$551#
3.	εμῖτ	west	<emNt>	/ʔɛ.mɪ̃t/	#7\$551#

以上の 50 例は、(8)で用いた制約群と制約ランキングで説明できる例であるが、これを用いても、説明できない例が少数あった。

(12)

a.	κρῖρῖ	murmur	<krMrM>	/krmr̃m/	#15555#
b.	ρρῖ	form	<hrB>	/hrβ/	#354#
c.	τωῖς	goad	<tôBs>	/toβs/	#1743#
d.	σῖλῖ	sticks	<cLM>	/kʰl̃m/	#155#
e.	ρῖoχ	be sour	<hMoč>	/hmɔ̃tʰ/	#3571#
f.	ρῖoκ	be still human	<hRok>	/hrɔ̃k/	#3571#
g.	ῖρρησῖ	lightning	<Bbrêce>	/ββrekʰə/	#445717#

<sup>20</sup> 8-10 の例は、ソノリティピークに SS がきていないが、「①一音節内に非成節的な /j, w, m, n, β, l, r/ が連続してはならないとする制約 >> ②初頭音節以外の音節は、頭子音を 1 つ持たなければならないとする制約 >> ③ソノリティピークは音節核を形成するとする制約。」の制約ランキングで SS の位置に音節核がくる。

(12a.)は、1) /kr̩m.r̩m/でも 2) /kr̩.mr̩m/でも最適解である。しかしながら、この語は重複語であり、語形成の仕方を考えれば、2)は、重複部(reduplicant)と基体部(base)の境界をまたいで、音節境界がひかれるが、1)は重複部と基体部の境界と音節境界が一致しているため、1)のほうがより自然であるといえるであろう。また、(12d.)は、これまでと異なり、sonority plateau の全体に、SS が引かれていると考えれば、説明がつく。

しかしながら、残りはまったく説明できない。すなわち、(12b.)の<hrB>/hrβ/, (12c.)の<tôBs>/toβs/, (12e.)の<hMoč> /hmot̩/, (12f.)の<hRok>/hrək/, (12g.)の<Bbrêce>/ββrek̩ə/である。これらは今後、説明されなければならない。可能性のある説明としては、いくつかの形態素から、これらの語が形成された、とする説明がある。すなわち、(12b.)<hrB>は{hr}と{b}から、(12c.)<tôBs>は{tô}と{bs}から、(12e.)<hMoč>は{hm}と{oč}から、(12f.)<hRok>は{hr}と{ok}から、(12g.)<Bbrêce>は{b}と{brêce}から、エジプト語のある歴史的段階で語形成によって誕生し、その形態素境界がコプト語でも意識されたために、上記のようなSSのつけ方がなされた、とする説明である。しかしながら、今回、Cerny (1976)の語源辞典をみても、そのような説明の証拠となるデータは得られなかった。今後の歴史的研究が待たれる。

## 5. おわりに

以上、コプト語サイド方言の、スープリニアーストロックが成節性を表すかについて、音韻論的立場から検証を行った。

その結果、以下の事が分かった。

(13)

SS 付きの子音	M	N	B	R	L
出現数	58	47	30	22	18

調べた語（自由形態素、動詞は基本形、複合語はなし）のうち、SS が付されているのは、(13)からもわかるように、ソノリティが母音や半母音の次に高い<M>/m/, <N>/n/, <B>/β/, <R>/r/, <L>/l/であった<sup>21</sup>。ソノリティピークにSSが対応している例は、全171語のうち、114語、対応していない例は、57語であった。対応していない例で、「①一音節内に非成節的な/m, n, β, l, r/が連続してはならぬとする制約>> ②初頭音節以外の音節は、頭子音を1つ持たなければならない制約>> ③ソノリティピークは音節核を形成する制約」という制約群と制約ランキングで音節形成を考えて説明できる例は、57語中50語であった。それでも説明できない7語のうち、他の要因で説明できるものは、2語であり、説

<sup>21</sup> 出現数であるため、単語数とは一致しない。例えば、r̩x̩r̩などは、2つカウントされる。

## コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおける スープリニアーストロックと音素配列

明できないものは、5語であった。よって、説明し得るものは、166単語で、全体の95%であった。

本稿によって、「SS=成節子音」説は、自由形態素についていえば、5語の例外はあるものの、調べた単語の95%について成り立つことがわかり、音韻論的にも有力であるということがわかった。残る課題は、拘束形態素についてである。拘束形態素は、自由形態素と異なるSSの配置の仕方を呈する。今後は、拘束形態素を中心に研究を進めていきたい。

### 参考文献

- Allen, James P. (2013). *The Ancient Egyptian language: An historical study*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Beltzung, Jean-Marc and Cédric Patin. (2007). A CVCV analysis of syllabic consonants in Coptic. <http://stl.recherche.univ-lille3.fr/sitespersonnels/patin/Presentations/2007-Beltzung&Patin-Coptic-syllabic-consonants.pdf>, accessed on 2014-4-30.
- Cerny, Jaroslav. 1976. *Coptic Etymological Dictionary*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, John. and Colin Yallop. (1995). *An introduction to phonetics and phonology*. 2nd ed. Oxford: Blackwell.
- Clements, G.N. (1990). The role of the sonority cycle in core syllabification. In: John Kingston and Mary Beckman (eds.), *Papers in laboratory phonology*, volume 1, 283–333. Cambridge: Cambridge University Press.
- Depuydt, Leo. (1993). On Coptic sounds. *Orientalia* (new series) 63: 338-375.
- Dum-Tragut, Jasmine. (2009). *Armenian: Modern Eastern Armenian*. London; John Benjamins.
- Goldsmith, John. 2011. Syllables. In: Jason Riggle John Goldsmith and Alan Yu (eds.), *The handbook of phonological theory*, 2nd ed. 164–196. Malden, MA: Wiley Blackwell.
- Layton, Bentley. (2002) *A Coptic grammar: With chrestomathy and glossary: Sahidic dialect*. Wiesbaden: Harrasowitz Verlag.
- Loprieno, Antonio. (1995). *Ancient Egyptian: A linguistic introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Prince, Allan and Paul Smolensky. (1993). Optimality Theory: Constraint interaction in Generative Grammar. Technical Report 2, Rutgers Center for Cognitive Science, Rutgers University.
- Smith, Richard. (1999). *A concise Coptic-English lexicon*, 2nd ed. Atlanta, GA: Scholars Press.
- Worrell, William H (1933). Syllabic consonants in Sahidic Coptic. *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 69:130-131.

### 謝辞

本稿を書くにあたって、仲尾周一郎氏には鋭いご指摘を多数頂いた。コプト語を言語学的に研究する上では、Eitan Grossman氏、戸田聡氏、Martin Haspelmath氏には有力なご助言

## 宮川創

を頂いた。そして、京都大学言語学研究室の構成員のみなさんには、日頃からお世話になっている。彼らと、研究をずっと励まし、支え続けてくれる両親に、この場をもって感謝の意を表す。